初等教育教員養成における教科専門科目（図画工作科）の授業（２）
― 2007 年度「初等科図画工作」の実践 ―

吉田　貴富・河野　令二・菊屋　吉生・中野　良寿・上原　一明

Lessons of Individual Academic Subject (Arts and Crafts)
in an elementary School Teacher Training Course (2)
- the practice of "Arts and Crafts for elementary education" in 2007 -

YOSHIDA Takatomi, KOUNO Reiji, KIKUYA Yoshio, NAKANO Yoshihisa, UEHARA Kazuaki
(Received January 15, 2008)

キーワード：教員養成、ＦＤ、図画工作、教科教育、美術教育、造形教育

はじめに

「初等教育教員養成における教科専門科目（図画工作科）の授業（１）― 2007 年度『初等科図画工作』の実践 ―」に続いて、立体造形分野と鑑賞・美術史分野の実践について以下に述べる。

１．【立体】河野令二：ボックスアートの材料と学習

１－１　はじめに

初等科図画工作の課題として、３年間に渡って、ボックスアートに取り組ませている。１年目の授業については、本研究紀要第 21 号に「学習へのまなざしの形成」としてその概要を報告している。今回の授業の報告では、材料から、学生たちの作品の成り立ちを見ていく。今回の授業でも、前回と同様の以下の項目で、アンケートを実施している。

１．　作品に意図したこと、主張したかったこと。
２．　作品にタイトルをつけるとしたら
３．　使った材料について　どこで手に入れたのか　どのように加工したか
４．　工夫したこと。発見したこと。考えたこと。失敗したこと。・・・・・・
５．　友達とのやり取りでためになったこと。（話したり、目で確かめたりしたこと。）
６．　この課題に取り組んでの感想を自由に。

学生たちが使う材料は、様々であり、材料との関わりが学習の多くの場面を形成している。アンケートの項目では、３．と４．が材料のやり取りの中心になっている。学生のアンケートの記述には、それ以外の項目にも材料に関する記述が多く見られる。この報告は、それらの材料とのやり取りの記述をたどり、学習の形成を見ていくことにある。

受講学生数は、52名であった（補記：うち1名が他の2分野を受講せず、A班の最終的な受講者数は既述どおり51名であった）。

1－2　使った材料について

この授業を振り返るためのアンケートの項目3．では、「使った材料について」、「どこで手に入れたのか」、「どのように加工したか」について記述をさせている。学生が使ったすべての材料を、アンケートの記述から、学生の記述のまま列挙すると以下のようになる。（商品名と分かりづらいものについては、括弧書きで※印を付け、簡単な説明を付した。）

ペットボトル、雑誌、リボン、折り紙、タバコの空き箱、チョロQ、指輪、三角コーナーの袋、アルミホイル、緑の仕切り、布、綿、貝殻、ビーズ、爪楊枝、毛糸、薄いピンクの紙、モール、刺繍糸、フェルト、紙(よれよれの細いもの)、草、割箸、お酒のパック、バンドエイド（※商品名）、安全ピン、人形（※ミニチュアの）、紙粘土、携帯電話の充電器、ガチャガチャ（※カプセルトイのケース）、針金、豆電球、とうもろこし(乾燥)、栗、松の木、ダンボール、新聞記事、砂、サンドイッチの容器、ガムシロップの容器、銀紙、十字架のアクセサリー、時計、綿棒、英字新聞、ガラスの破片、陶器の皿の破片、タイル、広告、スーパーの袋、スポンジ、プチプチ（※緩衝材）、便箋、紙コップ、針葉樹の葉、発砲スチロール、竹、つる、麻ひも、クレヨン、砂、CD，パソコンの冷却ファン、何かの端子、スプーン、ネジ、電池、ボンド（※商品名）、サンドペーパー、ネット、プラスチックのボール、石、画用紙、ボタン、クリップ、キーボードの一部、お菓子の袋、ビー玉、ブレスレット、ビン、ビニールテープ、雑草、トイレットペーパーの芯、プリンのカップ、色画用紙、チョコレートの包み紙、アルミホイルの芯、レース紐、樹脂粘土、カラーテープ、台所用排水ネット、金粉（料理用）、お弁当用のアルミカップの仕切り、透明の折り紙、カラーワイヤ、銅線、鬼の仮面、ペットボトルのキャップ、造花、磁石、ティッシュペーパーの空き箱、軍手、ゼリーの空き箱、フォーク、ストロー、スパンコール、靴(お菓子の容器)、セロファン、クラッカー、ぽんぽん（※毛糸の）、画鋲、レシート、ピック、鉛筆、ティッシュペーパー、ディスク保護用プラスチック板、おはじき、試験管、プラスチックの鎖(洗濯干し用の)、輪ゴム、ゴミ袋、たばこ、ポケットティッシュ、ドライフラワー。

1－3　どのように加工したか

「使った材料について」、「どのように加工したか」について、作品のタイトルとともに、そのいくつかを以下に紹介する。

図１　クモの巣

カラーワイヤ　切って曲げたりしてくもの巣を作った。
ビーズ　カラーワイヤに通したり、箱の中にはった。
折り紙　箱の側面にはった。
ビー玉　箱中に入れた。

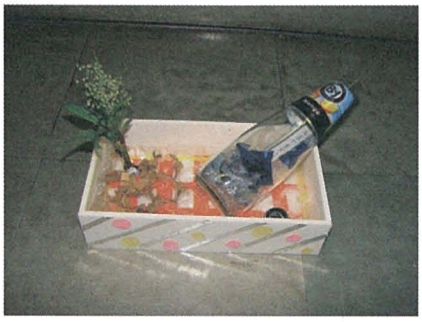


図２　夏の思い出～思いをこめて

折り紙　筒の周りに切って貼った。
草・枝　草と枝をくっつけて、木のようにみたてた。
ダンボール　ダンボールの色を生かし、切って、砂のイメージにした。
フェルト・糸　草と枝を結ぶときに使用
布　ビンの中に詰めた。
ビン　手紙やビニールを詰めた。
プチプチ　箱の底に敷き、透明感から涼しさを出した。
ナイロン　ビンの中に詰め、より透明感を出した。

図３　タイトルなし

画用紙　にぎってくしゃくしゃにした。
紙粘土　手と人間をつくった。
麻ひも　つなのように、上にはりめぐらした。
アルミホイル　手がギラギラした感じをだした。

図４　こころ

針金　水面のはもんに使った。
色紙　切って雨にした。
色画用紙　光も何もない真っ暗な空をつくるために、箱にはった。
カラーセロハン　箱に穴を開けて貼り、色つきの光がさしこむようにした。
わた　雲

図５　Free

英字新聞　手でちぎって貼る。
ガラスの破片　ランダムに貼る。
陶器の皿の破片　ランダムに貼る。
タイル　ランダムに貼る。
広告　英字の部分を選別し、手でちぎって貼る。
スーパーの袋　はさみで切って貼る。

図６　融合と調和

ＣＤ　手で割る。
パソコンの冷却ファン　分解して羽だけにする。
何かの端子　コードを切って先だけに
ネジ　そのまま
電池　そのまま
ボンド　ヘラで塗りつける。

図７　マネキン

ガラス　細かくくだいた。
布　適当に切って使った。
レースひも　切って、はった。
フェルト　まるめた。

図８　自力開道

竹　支柱にした。インディアンテントをイメージして加工。トンボの形にした。
木　台や柱、灯篭の形に加工した。
つる　籠のようなものを作ったり、特別な空間を作るために、まきつけた。
貝殻　目を引くように、アクセントとしてちりばめた。
ペットボトル　風車にした。
麻ひも　網目状にして巻きつけて、壁にした。
針金　材料を固定したり、風車の部品にした。

１－４　材料の加工と学習

この授業の課題の投げかけとして、材料の準備を含め、箱に何を構想し、構築していくのかを学生自身が決定していくことを求めている。

材料を「どこで手に入れたのか」については、家、家の庭、店で購入した、道端、大学構内、大学の廃材置き場、友達から等であり、出来るだけ身近な場からの、手に入り易い、不用な、無償のものを使うことを希望しているが、この３年間で購入したものが多くなってきている。

図１クモの巣の学生は、使った材料の在りかについて次のように記述している。

机の中にしまってあった。今はもう使っていなかったもので一つの作品が出来上がったことに驚きを感じました。この作品に使った材料は、すべて小さいころに使って遊んでいたものなので、思い入れも深いです。箱の中にいれたビー玉は子どもの頃の大切な思い出を表現してクモの巣を張って取り出せないようにしたかったのですが、簡単に取り出せます。

材料を準備することが、学習の出発でもある。材料へのおもいから、材料に触発され、制作の入り口に立っていく。そこでの工夫や材料とやり取りを次のように記述している。

クモの巣をただ張るだけでは物足りなくなったので、ところどころビーズを通して工夫しました。出の中が真っ黒でさみしいと思い、なかにもビーズをちりばめたのですが、少しやりすぎて、せっかくの夜露が目立たなくなってしまいました。計画的にやれば苦労はいらなかったのですが、箱を組み立てた後に黒く塗ったり、クモの巣をはった後にビーズをつけたり大変でした。

つくりながらイメージを膨らめせ、ビーズをワイヤに通し、夜露として黒い箱に浮き上がらす工夫によって、細いワイヤだけでは得られない効果を、クモの巣に作り出していく。始めの発想から、制作をしながら、イメージを積み重ねていく。

図２夏の思い出の学生は、材料との関わりを次のように記述している。

何か材料を買って作るというよりは、自分の家でいらなくなったものを使って、箱の中に。あるいは外に表現しようと思って作っていきました。正直、始めは何を作るのか、どのようなことを表現するのかは、まったく決まっていませんでした。しかし、手を動かして作っていくうちに、どのような材料がほしい、こんな風に表現していきたいという思いがたくさん出てきました。

材料と自分の表現の結びつきや、そこでの様々な試行を通して作品のへたどり着く制作の過程は、ただ材料を加工するだけではない。多くの材料の可能性を試すことで、材料の特性をうまく生かし、作品を豊かに構築していく。

作品のイメージを明確にし、そこに材料を準備し制作を始めることが、この学習をスムーズにしていくことは確かである。しかし、多くの学生は、そこにたどり着くまでの迷いを悩ましさとして語っている。そして、イメージを忠実に再現することへのこだわりと材料の加工というやり取りの難しさを語っている。できるだけ妥協せずに、始めの作品のイメージにたどり着くことが作品への完成度になっていく。

図３タイトルなしの学生は、制作の入り口での戸惑いを記述している。

なるべくそのまま紙やアルミを使うのではなく、くしゃくしゃにして、立体感を出そうと工夫しました。たくさん図工の時間がありましたが、何にしようか悩んで時間を無駄にしてしまいました。ですから、短時間しか残らず、大きく工夫できなくて失敗です。時間があれば、側面をとっぱらって、もっと大きなものが作れたのだと思います。

この学生は、「1．作品に意図したこと、主張したかったこと。」で、最近よく自分の夢に出てくる状況を作りました。心に闇があるのでしょうか。不安をこめてつくりました。と記述している。アンケートの項目1．の記述の多くは、作品の成り立ちというよりも、作品が完成した後の確かさを、作品への思いや考えを解説するように記述されている。この学生の作品は、イメージを大切にし、準備された材料で、確実にその具体化へ向かっていく。

図4こころの学生は、制作の出発を次のように記述している。

最初から、私は自分の心を表したいものを作ろうと思いました。頭の中では、もっときれいに作る予定だったのですが、やはり自分のイメージを形にするのはむずかしかったです。材料を、はじめのうちは自然のものを使おうと思って、枝や石などを持ってきたのですが、イメージにあわず、結局ありきたりなものになってしまった気がして、心残りです。

自分の中へのイメージに、材料がふさわしいのかどうかを学習の過程で、確かめることで、出発のイメージをできるだけ壊さずに、材料と関わり、作品にたどり着こうとしている。

イメージは、制作のなかで、中断され、解体され、別の新たなものに変化していく。それは、最終的なものではないかもしれない。変化は、瞬時であり、劇的に起きる。あるいは、徐々に起きる。

図5Freeの学生は、制作の過程を次のように記述をしている。

ただ、乱雑に、ちぎって貼っているだけに見えても、全体としてみると、それなりに作品に見える。自由に、感性のおもむくままにやってみることも大事だということ。

さらに、材料との関わりを次のように記述している。

英字新聞に貼り付けるだけだと、白黒だけの単調な作品になってしまいそうだったので、他の材料は、色にこだわった。広告の英字の部分を使用する際には、全体の雰囲気を壊さないよう、淡い色を中心に貼り付け、ガラスを張る際も、色のうすいガラスを中心に使用した。ガラスを通してみた英字は、周囲の部分とは見え方が違っているというのも面白い。最後にスーパーの袋の英字の（濃い青色）を貼ることで、全体が淡い色だけの単調なものにならないように工夫した。

材料との幾度かのやり取りをしながらイメージとの駆け引きをし、制作を成り立たせていく。そして、箱にメッセージを構築していく。そして、制作の過程が、そのままタイトルに示されていく。

図6融合と調和の学生は、制作の試行錯誤について記述している。

狭いスペースで、いかに表現するか、いかに主題を見る側にわからせるか、そして暗い意味するものを多く取り入れることを心がけて取り組んだ。うまく表現できなかったが、何度も試行錯誤するうちに、こうすれば面白いのではないかと、より豊かな感性を持つことができた。図画工作におけるスキルというのは、理解ではなく、発見から生まれるのではないかと思う。

作品への成り立ちは、試行である。ただ、ものを配置し、接着するだけではない。接着する前に、選択し、どこに配置するのか、材料を解体し、材料の質感や、色や、大きさといった特性を含めた様々なことが、試される。よりめざすものへ向かっていく錯誤である。

図7マネキンの学生は、準備してきた材料から作品の意図を探り出し、次のように記述している。

ガラスの透明感で、不思議な深さを出したかった。もっときらきらさせたかったのだが、なかなか難しかった。小ぎれいな感じにしたかったので、そこを割りとまとめられたと思う。

そして、制作の過程を次のように記述している。

ガラスを持って来たものの、何から手を付けていいのか戸惑ったが、仕上げることができて良かった。黙々と箱に何かを貼り付けていく作業は、何をしたいのか、この先どうなるのか、自分でも途中わからなくなってしまった。最初の思い描いていたイメージとは違ってしまったが、徐々に方向が定まってきた感じはあると思う。

目の前にある材料からイメージを手繰り寄せて、制作の過程でその方向を確かなものにしていく。

図８自力開道の学生は、材料へのこだわりと表現について記述している。

人工物や出来合いのもので、空間を構成するのではなく、すべて自然の素材を用い、自作のものを使うことで、野生的で、力強いなかにも、何かやさしさを秘めており。心なごむ、和の空間を表現しようとした。天然の色、竹の色焼の風合いが起因して、和やかな感じにできた。また、つるの巻き方が試行錯誤する自分の内面を表した。全方向に広がっていることで、道が様々であることを示している。かざぐるまは、調和をとるだけでなく、すべてのものが常に変化をしていることを伝えている（回転することで）。

表現することや表現したことへの具体的で明確な作品への解説である。箱から溢れんばかりの豊穣なイメージに近づけるために、様々な材料を物語のように着実に構築していく。

１－５　おわりに

今回の報告では、学生たちの材料への意識に、この学習を通じて少しだけ近づけたと考えられる。学生たちの材料へのこだわりや思い、材料への加工を含めた工夫ややり取りが、学習への取り組みであり、制作として、一人ひとりの方法の違いがある。その違いを決定づけているものは、作品への意図や主張である。そして、材料が果たす役割も大きいことが学生の記述から理解できる。多くの学生は、多くの材料を準備し、そこからできるだけふさわしいものを選択し、使っている。材料は、制約であり、その制約を乗り越え、作品に生かすための工夫という、加工を含めたやり取りの対象である。材料の加工は、明確にイメージ、あるいは製作の意図に繋げられていく。

この授業では、授業者の指示ができるだけ少ない分、できるだけ多くのことを学生自身に任せ、そこに向かうことで、学習が成り立っていく。造形の学習の宿命なのだろうか、学生たちは、自らの学習として、できるだけまとめ、完成を求めていく。授業者も、そのように授業を仕掛けている。ただ、そこでのつまずきや失敗、悩みや不本意なことなどを含め、学習が成り立っていくことも確かなことである。様々なことを含めた、学生たちの多様な学習を開き、その多様さを、授業のなかでうまく連携ができたらと思う。

今回のアンケートの項目が、この報告の意図にふさわしいわけではない。改めて、学習者がこの学習を分析するための項目や、学習の方法が材料のやり取りと結びつけることが可能な項目を検討したいと思う。

２．【立体】上原一明：立体造形制作指導に関する教材研究

日常生活の中の身の周りに存在し、何の変哲もない材料から独創的で意外性のあるものを創り出す事の驚きと、作ることに対する達成感の充実を目的とする授業方法を紹介する。

以下、ある日常的に手に入ることが可能なもので立体造形作品を制作する授業の過程を４つの段階に分けて述べる。１、材料の多様性の認識。２、イメージ・デッサンの重要性。３、イメージ・デッサンと実制作とのギャップ。４、制作意図と完成作品とを結ぶプレゼンテーション。その詳細は次の通りである。

２－１　材料の多様性の認識

まず、生徒には立体造形を制作するにあたって、日常生活の中で容易に得る事の出来る材料と接着素材・道具等を各人一品挙げさせ、その種類の膨大さを黒板に書き示す。その上で、今回の授業内容が“ミルクカートン（牛乳パック）という材料による作品制作”であることを伝える。生徒にとっては後に、これまで挙げられた他の素材も今後の授業内容に生かせるという参考ともなり、作品制作の選択筋の多様性を認識することが出来る。以下、実際に生徒から挙げられた品目である。

材　　料：紙（折り紙・牛乳パック・段ボール等）、木、石、粘土、
金属（鉄・針金・アルミ等）、プラスティック、布、糸、
紙粘土、ガラス、竹、アクリル、輪ゴム、水、空気、風船

接　着　剤：のり、セメダイン、ボンド、ステープラー（ホッチキス等）、
(固定するもの)　膠、漆、グルーガン（ホットボンド等）、テープ

道　　具：はさみ、カッター、のこぎり、ハンマー

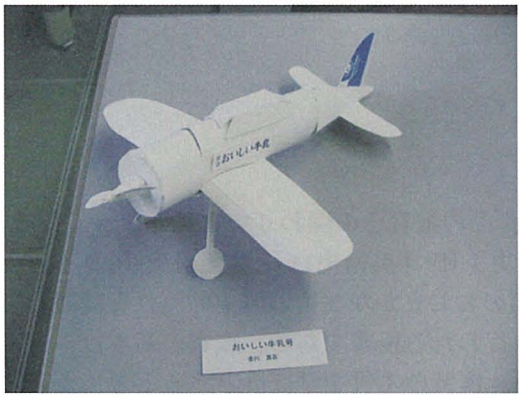
２－２　イメージ・デッサンの重要性

次にミルクカートンを使った作品のイメージ・デッサンを描かせる。様々なアイディアを考案させ、紙面にそのイメージを描き出す。その具体的な制作方法も考慮する。最初にイメージ・デッサンを描かせるねらいは、当初考案した形と実際に制作した時のギャップを感じさせることである。時には形にならず、構造的変更も出てくるであろう。または、実際の制作過程の途中で、予想外な効果や現象を発見するかもしれない。それらの発見等が、イメージと現実との距離感や、創造性に対する興味と実存的なものの認識及び現実的な現象の把握を可能にすることが出来る。それらの経験を通して自己確認へと導くことが期待される。

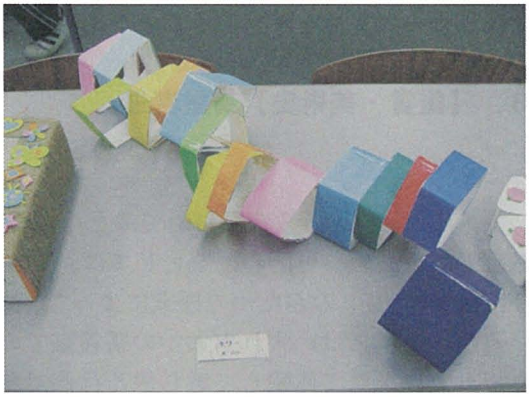
２－３　イメージ・デッサンと実制作とのギャップ

実際に制作に取り掛かると、様々な問題に突き当たる。ミルクカートンをいかにして美しく曲げ、立体的なフォルムを形成するのか？　切り込みは、どのようにして入れればよいのか？　水分をはじくミルクカートンの表面処理はいかにすべきか？等、生徒一人一人と向き合い、作品のコンセプトやその制作する過程を聞きながら問題解決方法を探る。結

果的に当初考案していたイメージ・デッサンとかけ離れた作品を制作した学生は、そのイメージしたものを、実制作の困難な状況を通過することにより、更にそれを昇華し、想像力を拡大することが期待される。



図版１　リアルに作った飛行機

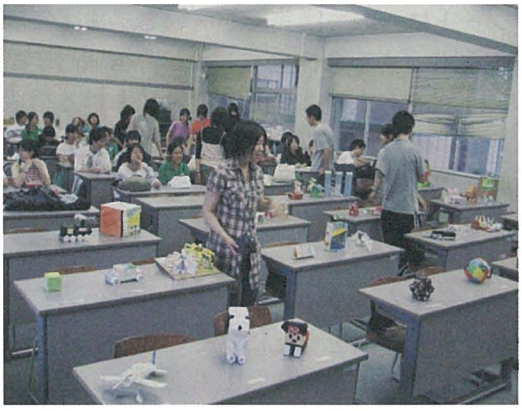


図版２　カラフルな抽象形体

２－４　制作意図と完成作品とを結ぶプレゼンテーション

授業最終日、前週で予め聞いておいた作品名と作者の名前を書き込んだキャプションをラミネート加工し、教室前３列に配置する。作者はそのキャプションの後ろに作品を並べる。10 分間の“小さな展覧会”を開催し、それぞれ他の生徒の作品を鑑賞する。ここで、自分以外の生徒の完成作品を見ることにより、相手と自分の個性の違いや独自性を改めて認識する。ある者は同じ条件の下で制作した他生徒の作品に対して驚愕し、ある者は自分にはないその完成度に感心する。そこにこの授業の重要な意味が表れてくる。「個の多様性と尊厳の認識」である。

“小さな展覧会”の後、一人一人生徒を作品の前に立たせ、その制作意図や制作方法、またどのように小学生児童にその楽しさや意義を伝えるか等発表させる。そこで、完成作品では伝えきれなかった思いや、制作する際の困難な点、工夫した点などを伝えることが出来る。また、他の生徒のコンセプトを聞くことにより、創造性の幅広さを認識する。



図版３　作品発表会の風景

図版４　モアイ像

以上、初等科図画工作立体の授業過程を紹介したが、一人一人の個性を引き伸ばすことの重要性と、個々人が制作した作品の多様性や工夫の可能性を実際の制作を通して互いに学習する姿勢をつくることが出来れば、今回の授業は成功したといえる。そしてなにより「個の多様性と尊厳の認識」が美術教育の究極の目的であるということが伝われば、その存在意義の大きさを確認することが出来よう。

３．【鑑賞・美術史】菊屋吉生

３－１

美術史は、初等科教育においてはとくに美術作品の鑑賞との関わりで重要となってくる。教育学部での教科専門の授業としては、「美術史Ⅰ(西洋美術史)」と「美術史Ⅱ(日本および東洋美術史)」のふたつの授業によって、東西のおおまかな美術の歴史的流れを概観しているが、これらはいずれも大学の講義室でのみ行われる授業である。鑑賞の基本は、あくまでも実作を見て体験して感じ取る行為である。鑑賞の本質を学ぼうとするとき、一方的な教室内での講義だけではなかなかその理解や認識を深めることはむずかしい。そこで、実際の美術作品をもととした鑑賞体験をふくんだ授業を、できるうるかぎり取り入れるように心がけている。以下に述べる授業は、そうした鑑賞実践を取り込んだものである。

３－２　「初等科図画工作」における実践

初等教育教員養成における美術教育の教科専門のオムニバス形式の授業の一環として、美術史(鑑賞教育)を担当している。

90分授業の２枠であるが、最初の授業では、前半は鑑賞教育の意義、歴史について話し、後半は鑑賞教育の実践について講義をしている。学校現場では、少ない授業時間数、校外学習の困難などから、往々にして教室内だけのテキストの図版による鑑賞という形のみが行なわれがちであるが、その問題点にふれ、なぜ近年とくに実作品をもととした鑑賞教育が叫ばれるようになったのか、その歴史的変遷について述べる。また後半は、鑑賞教育の実践として、Visual Thinking Methodを紹介し、スライドを使って作品を見せながら、その実践を試みている。生の作品で行なえばさらに効果があるのだろうが、受講人数(100名近く)や授業時間数も考えると、美術館や博物館へ出かけて行くことはむずかしいため、この形式で行っている。

２回目の授業では、ワークショップとワークシートについて講義をしている。まず実際のワークショップ実践の例として、ビデオ(ＮＨＫ制作『あっち向いてピカソ』結城昌子指導)を見せ、そのワークショップを導入部分と実践部分とにわけて、それぞれにおける構成上の工夫や子供たちの言葉や感想を引き出すための工夫について学生たちに考えさせている。またワークシートに関しては、全国の美術館、博物館で現在使用、あるいはかつて使用したワークシートの実例を紹介し、それぞれの特色と目的を解説。また実践例として平成11年度に山口県立美術館において実施した山口大学大学院教育学研究科美術教育専修の学生の企画、作成によるワークショップとワークシートをスライドにて紹介している。さらに授業の最後に受講学生に、研究室所蔵の実際の美術作品をもとに、その作品の見どころをやさしく解説する小学校高学年を想定したワークシートを作成してもらっている。ここでは、学生各自が自由にふたりのキャラクターを設定し、そのふたりの対話形式で、実際の美術作品の魅力を語ってもらうという形のものである。その際、当然学生各自の作品

に対する独自の見方を紹介してもらうようにはするが、ただそこでは自分の見方の押し付けを行うのではなく、むしろ作品には多様な見方が存在することに留意しながら、ワークシートを作成してもらっている。

おわりに

山口大学教育学部美術教育講座のスタッフは、2000年度以降退官者が相次ぎ、常に欠員のポストを抱え全分野の教員が揃わない状態が続いていたが、2006年度後期から久しぶりに絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術史・美術理論、教科教育、全6分野の教員が揃った。その結果、「初等科図画工作」も全分野を専門の教員で担当することが出来るようになった。授業が専門の専任教員によって担当されることは、学生にとっても好ましいことである。今回、久しぶりに充実した体制での初年度の実践を報告した。各担当者の記述には各々の工夫と反省とが見られる。本稿によって、授業研究・授業改善のための「記録」と「公開」の作業を終えることができた。今後は「反省」の作業を、個々の担当者レベルに留まらず、相互の授業観察や反省協議会の開催によって集団的な省察のレベルを目指したい。

【執筆分担】

（1）、（2）を通じて、各担当者の実践に関する記述は各節の見出しに掲げた担当者が執筆し、「はじめに」と「おわりに」を吉田が執筆した。